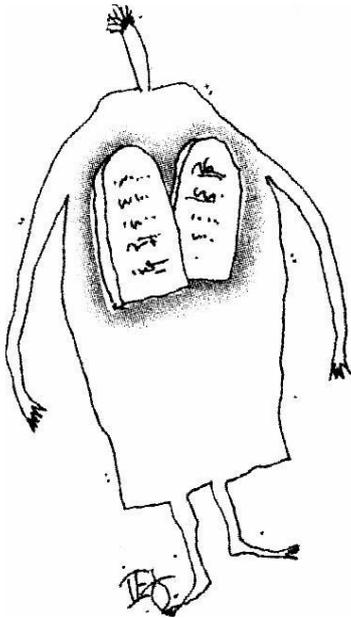


二枚の石板

第2編8章

道徳的律法(十戒)についての説明



私たちの隣人とは誰なのでしょう？他人を見て点数をつけ、分け隔てすることで私たちは人を愛することができません。私たち自身が悪い習性と弱さを持っているために人を見れば愛するよりはむしろ憎むことのほうが簡単なのです。ですから私たちはいつもまず神を見つめなければなりません。神を愛する心で人を愛さなければならないのです。

十戒はもともと石の板の上に記されていました。神が与えてくださった二枚の石板に神が直接書き記してくださったのです(出 31:18)。その二つの石板は数世紀の間、エルサレムにあった神殿の聖なる箱の中に保管されていましたが捕囚時代(BC606-536)に残念にも失われてしまいました。しかし、その内容は一つも失われることなく聖書の中に残されています(出 20:2-17)。そして今日、聖霊はその戒めをすべての信徒の心の内に記してくださるのです(エレミヤ 31:33;ヘブライ 10:16)。それでは私たちはこの二つの石板をよく理解しているのでしょうか？

第1節 律法は神の目的に照らして霊的に解釈されるべきです

律法はすべての人の良心に記録されています。内的律法、つまり自然的律法として残っているのです。しかし、誤った認識と暗闇に支配されている人間はそれを正しく悟れません。ですから神はそれを文章に残して、すなわち書かれた律法を私たちに与えて、内的律法のぼんやりとした部分を明らかに示されたのです。では、律法をどのように解釈されればよいのでしょうか？三つの方法があります。

第一に、戒めの大部分は部分的な表現法になっていることを知る必要があります。ですから、「殺してはならない」という表現は殺人という言葉が抱えているすべての同様な領域をみな含んでいるということになるのです。ねたみや、憎しみ、嫉妬、暴力、暴言、殺人などがそこには含

まれています。殺人はこの中でもっとも凶悪で恐ろしいものなのでその代表として選ばれているのです。

第二に、表現された戒めの反対側を推論していかなければならないということです。ですから「殺してはならない」という戒めの反対側は敵までも愛しなさいとなるのです。神が律法で悪事を禁じられるのは反対に善き義務を命令されていると言えるのです。

第三に、表現された戒めの内面を推論していかなければなりません。「殺してはならない」とは身体を傷つけたり、殺す行為と同時に心で憎み、ねたむことまでも禁じているのです。このように常に戒めを与えられた神の完全な目的を通して律法を解釈する必要があります。

それでは整理してみましょう。「殺してはならない」という戒めを神はなぜ与えられたのでしょうか？それは私たちが自分の肉体と心を用いて隣人の命を守るようにと命じられているのです。神の目的に従って戒めを解説することが、霊的な解説と言えます（参照、マタイ福音書 5 章の山上の説教、ローマ 7:14）。ところで神の律法は二つの板に分けられています（マタイ 19:19）、一つは神を礼拝することと関係した宗教的な義務の部分です（1-4 戒）、そしてもう一つは人に対する愛の義務です（5-10 戒）、イエスは律法全体をその二つのテーマに要約されています（ルカ 10:27、マタイ 22:37、39）。

ある人々は愚かにも最初の板の第二戒をなくして、二枚目の板の第九戒を二つに分けようとしています。また最初の板の戒めと二枚目の板の最後の戒めを破ることを「小罪」と言ったりしているのです。しかし罪に小罪と大罪の区別があるのでしょうか（マタイ 5:19）ともかく階段の一段目がないなら二段目はないように、神に対する義がないなら、人に対する義もありえないのです。神のみ名を冒瀆し、汚しながら、淫行で自分の体を汚さないということがいったいどのような義になると言えるのでしょうか？

第 2 節 十戒についての簡単な解説

序言：「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」（出 20:2）これは律法全体に対する前置きの言葉です。三つの言葉がここには語られている。第一は、神は私たちにそのように命令する権利があるということです（申 7:6、エレミヤ 31:33）、第二に、神の恵みを覚え、喜びに満たされた心で律法に服従し、恩知らずになってはならないと警告してくれていることです。第三に、主（ヤーウェ）と言う名前を通して自分だけが神であることと全宇宙の絶対的な統治者であることを宣布していることです（ローマ 11:36）。出エジプトしたイスラエルは罪から解放された教会の雛形です。ですから律法は今を生きる私たちに与えられたものだと言えるのです。

第一戒：「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出 20:3）。神お一人以外にはほかの神はありません。神が最高であり、神だけが権威を持っておられるのです。この言葉には二つの意味があります。第一に、神のためだけに人生を生き、神と共に人生を生きなさいと私たちに教えることです。そして第二にはすべて迷信を捨て、そこから離れなさいということです。

第二戒：「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」（出 20：4,5）。迷信的な儀式で神を礼拝してはならないということを語っています。神にささげる礼拝は霊的な礼拝でなければなりません。この言葉は二つ

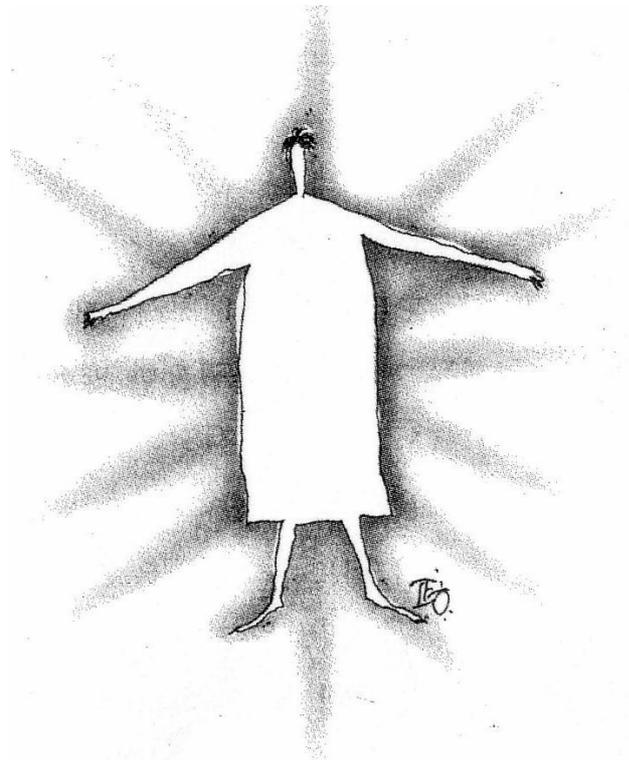
の意味を持っています。無限なる神をある形にかたどって、神を私たちの見て触れることができる世界に引き下ろしてはならないということ、そしてそれがどんな形でもあってもそれに宗教の名の下に礼拝をささげてはならないということです。神は悪を犯した父親の罪を正しい子供に償わせる方ではありませんが（エゼキエル 18：20）父親の罪を覚えてその子孫たちを罪の中に放置され裁かれることもありますし（詩 39：6,7）反対に父親の行った善行を覚えて子孫たちに恵みを与えることもあるのです（申 5：10、エレミヤ 32：18、創 17：7、箴言 20：7）。

第三戒：「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおられない」（出 20：7）。神のみ名を尊び、敬虔なる畏れをもって使わなければならないということです。常にその名前にふさわしい賛美をささげ、いたずらに迷信や貪欲のためにその方の御言葉や神秘を取り扱ってはならないと言うことです。特に畏れなく神とその行いを批判し、悪く言うことは慎まなければなりません。また、神のみ名で誓うときも神の栄光のため、正義と愛のために行うときだけ許されます。そして私たちはその誓った内容を真実を尽くして行わなければならない（詩 19：18、ローマ 1：9）。再洗礼派はすべての誓約を禁じますが、それは誤解でしかありません。イエスが禁じた誓いは偽りの不必要な誓い、つまり律法の規範を破る汚れた誓いのことです。公的でも私的でも敬虔と愛のためのものであれば神のみ名で誓約することができるのです（サム上 24：12、コリ二 1：23、ルツ 3：13、創 21：24、31：53、54）。

第四戒：「安息日を心に留め、これを聖別せよ」（出 20：8-10）。安息日厳守はちょうど私たちの敬虔の生活の象徴のように大きく取り扱われています（民 15：32-36、エゼキエル 20：12,13、詩 56：2）。ですからあるキリスト教徒たちは今でもユダヤ教的安息日としてその日を守っています。週の七日目を一日目に変えただけで、一週間のうちの一日を旧約の安息日のように徹底して守らなければならないと言っているのです。これはユダヤ人の誤りを三倍にしたような幼稚で肉

的な迷信です。（詩 1：13-15、58：13）
現在、教会は安息日を旧約のユダヤ人のように守ってはいないのです。

ですから、教会が週の最初の日を主の日と呼び、集会の日に定めているのは次のようないくつかの理由のためです。第一に神が熱心に集まることを命令されているためです（ヘブ 10：25）。第二に毎日集まることができないからです。第三に旧約のイスラエルの民にそうであったように、教会の秩序維持と敬虔のための訓練に少なくとも一週間の中の一日の集まりが必ず必要であるためです（使徒 2：42）。第四に安息日に象徴として与えられた霊的意味（安息）がイエスにあって成就されたことで、それ以上私たちは外的な安息日を守らなくてもよいこ



とを宣布する必要があるためです。

ですから教会は次のようないくつかの目的のために主の日を守ります(コリー 16 : 2、黙示 1 : 10)。第一に休息です。ある日を聖別するための休息ではありません。永遠の安息を黙想して、聖霊が私たちのうちで働かれるようにするのです。第二に敬虔の訓練です。勤勉に個人の敬虔を訓練し、教会が定めるとおりに公的礼拝と聖餐式に参加し、共に祈禱に励むことを教えるのです。第三に慈しみです。私たちが目下にある人たちの労働を休ませて、彼らを過酷に圧迫してはならないということです。

第五戒：「あなたの父母を敬え」(出 20 : 12)。目上の人々を尊敬して、敬意を表し(出 21 : 17、レビ 20 : 9、箴言 20 : 20) 服従し(申 21 : 18-21、エペソ 6 : 1-3) 感謝をささげることを教えます(マタイ 15 : 4-6)。身近で服従しやすい父母をまず上げることで目上の人々に対する私たちの態度と習慣を正しく導き、訓練しようとされるのです。しかし、それはただ主の内においてだけ命じられていることを覚えなければなりません(エペソ 6 : 1)。なぜなら彼らが持っている立場は神が与えてくださったものであり、私たちが神に導くために与えられたものだからです。

第六戒：「殺してはならない」(出 20 : 13)。私たちはお互いに全体の安全を考えなければならないという意味です。さらには他の人の霊魂の安全と救いのために心がけなさいという意味を持っています。そしてこの戒めは二つの根拠を持っています。一つは私たちが皆、神の形であるということともう一つは私たちが皆、一つの血肉からできているためです。

第七戒：「姦淫してはならない」(出 20 : 14)。心の純潔と体の貞操を清く守りなさいということです(コリー 7 : 34)。むやみに独身を選択せず(マタイ 19 : 11,12) 私たちの大部分は結婚制度の中で自分たちの内側に起こる情欲を統制し(コリー 7 : 2,9) 自分の配偶者とともに喜びを分かち合って生きることが大切です(創 2 : 18)。

第八戒：「盗んではならない」(出 20 : 15)。他の人の所有を貪らず、積極的に人の益のためにつくさなければならないということです。聖書が要求する他人に対する私たちの義務を行うことが大切であって、それをしないことはむしろ他人に私たちがなすべきことを果たさない「盗み」の行為とみなされるのです。

第九戒：「隣人に関して偽証してはならない」(出 20 : 16)。偽りの言葉で人に害を与え、人の財産を損なうことは許されず、すべての人の名誉と所有のために真実な言葉を持って助けなさいということをお教えます。もちろん、懲らしめのための目的とする公的な非難や告発、告訴を禁じているのではありませんし、悪を是正するために行うふさわしい非難や批評も禁じてはいません。偽りの証言は隣人を憎しみをもって、悪い意図で、誹謗するためにする悪口を禁じているのです。

第十戒：「隣人の家を欲してはならない」(出 20 : 17)。愛する習性と相反するすべての欲望を心の内から追い出すことを教えています。心に隣人に損失を及ぼすような思いを抱かず、ただ隣人の幸福と益のための考えを持ってと言うことです。貪欲から私たちの心を強く刺激する空想に陥ってはならならず、むしろ神を深く瞑想することで心に愛を満たしなさいと言っているのです。愛と貪欲な心は相反するものだからです。

第3節 律法を与えられた目的は敬虔から出る愛を行えということです。

律法全体の目的は義を実践することです。神の純潔を模範として私たちもそのように生きなさいと教えているのです。そのためにはまず私たちが神に対する愛を心に満たさなければならま

せん。そしてその愛の泉から隣人に対する愛が流れ出るのです（申 6：5、マタイ 22：37、39）。テモテへの手紙第一 1 章 5 節にある言葉のように、神が私たちに律法を与えられた目的は真実なる敬虔（聖潔な心、善なる良心、偽りのない信仰）から出る愛を行わせるためでした。

それでは私たちの隣人とは誰なのでしょう？他人を見て点数をつけ、分け隔てすることで私たちは人を愛することができません。私たち自身が悪い習性と弱さを持っているために人を見れば愛するよりはむしろ憎むことのほうが簡単なのです。ですから私たちはいつもまず神を見つめなければなりません。神を愛する心で人を愛さなければならないのです。

結びの言葉

律法に近づけば近づくほどそれは私たちに神の偉大さと自分の罪を示してくれます。そして私たちは神を賛美する一方で、自分の真の姿が示されることで、そこから助けを求めざるを得なくされるのです。聖霊はその律法を私たちの心のうちに記してくださいます（エレ 31：33、ヘブ 10：16）。これがすなわち新しい契約です。それで新しい契約を受けた私たちは昔のイスラエルの民よりより簡単に、より分かりやすく、より完全に律法を知って守り行うことができるようにされるのです。そしてイエスの十字架の血はみ言葉通りに生きることのできない私たちの弱さを助けて、私たちの悔い改めた罪をすべて許してくださるのです。主の戒めを読んで聞き、その通り守り行う者が本当の成功者であり、幸福な者であることを私たちは信じましょう（黙示 1：3）。